

西日本の土器棺墓と埋葬遺体

角 南 聡一郎

Soichiro SUNAMI

I. はじめに

本稿では、西日本地域の弥生時代～古墳時代前期の土器棺・土器棺墓¹⁾から検出された遺体を集成し、被葬者の年齢を考察することから、従来から定説となった感のある土器棺は「子供」の墓であるという前提について検証する。

従来、土器棺は、副葬品を持たず遺体が出土しない場合棺の法量を重んじて、被葬者を想定する手法が一般的にとられてきた。しかし、東日本で盛行する再葬墓同様の土器棺の使用法も、可能性の一つとして考えられないわけではない。

成人の遺体と比べ未成人の遺体、ことに乳幼児の遺体は遺存すること自体が非常に稀であり、更に骨の残り易い条件としては貝塚、洞穴、砂丘への埋葬があげられている（松下 1994）。この条件を満たすことの多い縄文時代の遺体に比して、弥生時代の遺体は条件に適さず遺存する場合は少ない。こういうこともあってこれまで注目されることは少なかったといえよう。そこでここでは、まず土器棺墓の被葬者に対する解釈を、土器棺墓の研究史を振り返りながら読みとることを試みる。そして、それらの解釈に対する問題の所在を明確にしたい。これらを踏まえて、いくつかの仮説を立てる。続いて西日本地域で、土器棺内から遺体が発見された例を集成し概観する。次にこれらの事例について時期別・地域別等、具体的に検討する。この検討結果に基づいて、先に設定したいいくつかの仮説を検証し、若干の私見を述べることとしたい。

II. 問題の所在と仮説の設定

II-1 研究史—問題の所在—

まず、戦前から1950年代にかけての土器棺墓の被葬者をめぐる見解をふり返る。西日本ではじめて、「甕棺墓」以外の土器棺墓を紹介したのは吉見益見である。吉見は広島県高井出土の合口の土器を、何人体存在の立

証ができないとしながらも、幼児埋葬用のものである可能性を指摘した（吉見 1926）。これ以前に中山平次郎は、北部九州では「大形合わせ甕」、
 「小形の合わせ甕」「単甕」などが埋没した状態で見つかることがあり、
 「大形合わせ甕」中から成人骨が発見されたと伝え聴くこと、甕のサイズ、
 中国鏡が伴うことから、甕が埋葬用の棺であることを説く（中山 1920）。吉見の合口状態で土器が出土したことへの解釈は、当時中山の説が広く認知されていた背景があると考えられる²⁾。続いて末永雅雄は、奈良県宮滝遺跡の「合蓋土器」を、その埋設状況から乳幼児の棺と考えた。その理由として棺のサイズが洗骨・火葬骨でない限りは、到底成人を収容できない点と、実際には何らそうした遺物を留めない点をあげた（末永 1944）。近藤義郎は岡山県上東遺跡出土の土器棺を紹介し、この土器棺は意識的な埋設、棺身に使用された土器の打ち欠き、棺の容量から被葬者を胎児または小児とする。また北部九州の成人用甕棺は中国地方では使用されず、胎児ないし小児用の土器棺のみが採用されたと考えた（近藤 1952）。小野忠熙は、土器棺墓の葬法として、火葬と洗骨葬のいずれかの可能性が高いとした（小野 1955）。間壁葎子は、岡山県上東遺跡出土の土器棺を紹介する中で、被葬者の胎児か幼児か、または成人が焼骨・洗骨され埋葬されたかについては保留しながらも、北九州の甕棺とは幾らか異なった意味を持つと考えた（間壁 1958）。潮見浩は、甕棺墓以外の土器棺墓は基本的には乳幼児葬のためのものであり、乳幼児を土器の中に納めて埋葬する墓制は、縄文時代後・晩期の葬法を受け継いでいると考えた。しかし、「合口」の土器棺の上に石を積んだ「積石壺棺」は、乳幼児埋葬用のものではなく、一般的に見られる壺棺でない点、「合口土器」の収容量などから、屈葬による成人の埋葬の場合を想定した（潮見 1959）。

戦前から1950年代の段階では、土器棺に遺存した遺体の発見例もわずかで、遺体についての医学的な鑑定が行われることは、間壁葎子が金関丈夫に人骨の鑑定を伝来している程度で稀であった。発見例はほとんどが乳幼

児であることと、棺として利用された土器の容量から被葬者は乳幼児であるという考えが主流である。しかし、成人の火葬・洗骨葬による遺体を二次的に埋葬したとする説も僅かながら支持されている。また土器棺墓は北部九州の甕棺墓とは、区別して考えられていたこともわかる。付言すれば、潮見がいう様に、土器棺墓を縄文時代後・晩期からの系譜下にあると考えも既に一般化していたようである。

この後しばらくの間、土器棺墓の被葬者についての論説の進展は見られない。これは、土器棺内に遺存した遺体の例がほとんど増加しなかったことに起因すると考えられる。つまり土器棺墓に対するイメージ・認識は、1960年代までには既に、ほとんど完成していたことがわかる。ところが、この土器棺墓に対するイメージ・認識、つまり土器棺墓＝乳幼児の墓という前提は体系的に整理されたり、検証されたりする場合は少なかった。土器が意図的に埋設されたような状態で検出されたり、土器が「合口」の状態であれば、例え遺体や副葬品が見られなくとも、考古学者は無批判にこれらは乳幼児の棺であるとしてきた。こうした状況の中で、1980年代後半以降、土器棺墓の被葬者に対して再考を試みた論考が、いくつか発表され研究の進展があった。次に見ていきたい。

藤田等は、弥生時代北部九州における未成人の埋葬について検討した。藤田によれば、縄文時代晩期の支石墓の内部施設、甕棺墓が流布する以前の土坑墓・木棺墓の分析から、未成人でもその年齢によって埋設施設が区分されていると考える。甕棺墓が流布すると、乳・幼児（5歳まで）は土器棺墓に、それ以上は甕棺墓に埋葬され、甕棺墓が波及しない地域では甕棺墓に対応する成人用の埋葬施設として土坑墓があり、同様に5歳までは土器棺墓に、それ以上は土坑墓に埋葬されるとした。以上のことより、弥生時代社会における共同体成員としての下限は5～6歳にあると考えた（藤田 1988）。これに対して、辻村純代は5～6歳以下の幼児埋葬でも成人と同様の副葬品が見られることから、これらの幼児が成員権を与えら

れていなかったとは到底考えられないと批判する。また辻村は、未成人埋葬における畿内的特徴として、胎・乳児が土器棺に埋葬されるのを除くと、成人と未成人の葬法は基本的に区別がないとし、これは縄文社会的特徴であると考えた（辻村 1993）。笹川龍一は、彼ノ宗遺跡と九龍頭遺跡の土器棺墓から出土した遺体の、医学的鑑定結果を踏まえ、「壺棺葬」は「小児」に限られたもので、成人は箱式石棺等に葬られることを想定する。つまり、「壺棺」から出土する遺体の年齢の上限が限られてくれば、その年齢こそが「小児」と「大人」を区別する成長の段階の区切りを明示しているのではないかと指摘した（笹川 1988）。芋本隆裕は西ノ辻遺跡・鬼虎川遺跡の例では、壺を棺身とする場合には胎児が、甕を棺身とする場合には乳児が葬られたことを指摘し、棺に用いられる土器の器種の違いには意味があるとす。またこれらの土器棺がいずれも旧河道付近から見つかったことより、早産や死産あるいは生後間もなく死亡した乳児などは、集落構成員の墓域には埋葬せず意識的に川岸に葬られた可能性があるとする（芋本 1992）。亀山行雄は、岡山県下の弥生時代～古墳時代前期にかけての土器棺墓を集成し、土器棺墓の被葬者について想定している。岡山県下での土器棺墓内遺存の遺体はいずれも乳幼児のもので、小児・成人の遺体は見られないことと、棺の容量から被葬者が乳幼児であった可能性が高いとする（亀山 1995）。

この様に近年では、土器棺内から検出される遺体の事例も増加し、医学的な鑑定結果も公開されるようになった。しかし、これらの土器棺墓出土遺跡を同一基準から体系的に検討した研究者はいまだいない。そうした研究現状の中で、本稿でこれから行う土器棺墓出土遺体の集成と検討は有意義であると考えた。

II-2 仮説の設定

これまでの土器棺墓の被葬者に関するイメージや解釈を考慮し、更に前述の土器棺墓の被葬者を検討する上での問題点を加味して、仮説を立てて

みたい。

【仮説】土器棺の被葬者の年齢は、時期や地域によって異なっているが、その時期・地域において、「大人」ではなく「子供」³⁾とみなされた人間が土器棺墓に埋葬された。

II-3 検討の方法

仮説を検証するために、西日本土器棺・土器棺墓出土の遺体を集成する。次にそれらの遺体の医学的年齢の推定結果に依拠し、被葬者の年齢の幅を時期別に検討する。更に、棺身のサイズを参考としながら土器棺の被葬者について考える方法をとりたい。

III. 各地域の土器棺埋葬遺体（表1，図1～9）

以下、西日本各地域での遺体（骨・歯牙）を内包した土器棺墓について事例をあげる。今回、筆者の管見にふれた土器棺出土遺体が発見された事例は、6府県19遺跡32例である。まず、これらの諸例について見ていきたい。なお、土器棺・土器棺墓の立地・器種組成・埋葬状態については筆者の分類に従っている⁴⁾。

さて遺体の在り方について、時期別、地域別、年齢別に見てみたい。まず時期別ではどうだろうか。弥生時代前期の例は、中ノ浜遺跡1960年度1号甕棺、同遺跡1960年度2号甕棺、同遺跡1960年度3号甕棺、綾羅木郷遺跡の計4例がある。弥生時代前期末～中期初頭の例は、長瀬高浜遺跡、中ノ浜遺跡1971年度J-3区壺棺の計2例がある。弥生時代中期前葉の例はない。弥生時代中期中葉の例としては、田能遺跡第10号墓、同遺跡第20号墓2例である。弥生時代中期後葉の例には、亀井遺跡土器棺墓SX3002、同遺跡土器棺墓132-OU、西ノ辻遺跡第17次2例、同遺跡第23次B地区甕棺墓、同遺跡第23次C地区壺棺墓、同遺跡第27次土器棺、鬼虎川遺跡で計8例と多い。弥生時代中期末～後期初頭の例は、巨摩遺跡、朝谷遺跡の2例である。弥生時代後期前葉の例は、上東遺跡、津寺遺跡、鹿田遺跡の3

例である。弥生時代後期後葉の例は、彼ノ宗遺跡SX-01、同遺跡SX-03、同遺跡SX-09の計3例がある。弥生時代終末のものは、用田遺跡、彼ノ宗遺跡SX-05、九頭神遺跡、稲木遺跡の4例である。古墳時前期は、田能遺跡第12号墓のみである。

分布は、中国地方で7遺跡11例で、四国地方では5遺跡8例、近畿地方で6遺跡13例である。

被葬者の年齢については、胎児が2例で約8%、胎児もしくは乳児とされるのが2例で約8%、乳児が8例で約33%、幼児が5例で約21%、小児が3例で約13%、若年が1例で約4%、若年～成年が1例で約4%、成年が2例で約8%である。

次に被葬者の年齢を時期別に見てみよう。弥生時代前期末は、成年が1例、乳児が2例である。弥生時代前期末～弥生時代中期初頭は、成年1例、乳児例1、幼児例1である。弥生時代中期中葉は、胎児あるいは乳児例1、幼児例1である。弥生時代中期後葉では、胎児例1、胎児あるいは乳児例1、乳児例4、幼児例1、小児例1である。弥生時代中期末～後期初頭は、幼児例1である。弥生時代後期前葉は、胎児例1、乳児例1である。弥生時代後期後葉は、幼児例1、小児例2である。弥生時代終末は、乳児例1、小児例1、若年～成年例1である。古墳時代前期は、幼児例1である。

遺体の年齢が判明している例は全部で24例ある。とりあえず現在の区分である20歳という基準で未成年と成人に区分してみたが、この際、若年～成年とされる稲木遺跡例が問題となる。ここでは分析結果の年齢の下限に注目し、未成年に含めている。すると未成年は22例、成人は2例である。つまり未成年は約92%、成人は約8%、土器棺に埋葬された被葬者は圧倒的に成年が多いといえる。また成人を土器棺に埋葬するのは、弥生時代前期末～中期初頭のみである。しかし、弥生時代終末の稲木遺跡例では、未成年だとしても成人に限りなく近い年齢が、土器棺に埋葬されていることになる。更に年齢の区分を限定してみると、胎児～小児は20例で約83%、

若年以上は4例で約17%となる。

IV. 土器棺被葬者の諸問題

前章で見た様に、土器棺埋葬遺体を集成検討した結果からすれば、土器棺へはほとんどの場合胎児・乳児・幼児・小児が葬られており、中でも胎児と乳児が多いことがわかった。つまり、現代人の我々の感覚からすれば、従来から指摘されていた「土器棺は子供の墓である」という前述の仮説は誤りでない場合が多いといえる。

それでは、胎児・乳児・幼児・小児以外の土器棺被葬者は、どう考えれば良いのだろうか。そこで成人が被葬者と考えられる例について少し詳しく見ておこう。大阪府巨摩遺跡例は、弥生時代中期末～後期初頭の11号方形周溝墓方台部に埋葬されていた（三好ほか編 1995）。棺内からは歯牙が1点出土した。報告では「成人の歯」とされるが、これは乳歯でなく永久歯の臼歯という意味での表記であり⁵¹、歯牙1点のみであるから直ちに被葬者を成人としてしまうには疑問が残る。永久歯の萌出年齢は、最小が6.0歳からであり（片山 1990）、被葬者の年齢の下限は6歳と考えることも可能である。

山口県中ノ浜遺跡の1970年度H-2壺棺は、棺身に弥生時代前期末～中期初頭の壺を用い、石蓋がされていた。土器棺内には、成人の左腕部のみが収納されていた。この腕は軟部が腐敗する前に切断されたものであると考えられている（岩崎 1984）。この場合は明らかに一般の成人埋葬ではなく、異常な遺体の埋葬状態であるといえよう。また土器棺に成人を埋葬するのは、弥生時代前期末～中期初頭に限定され、地域を山口県とする場合のみである。これらのことから、弥生時代前期末～中期初頭の山口県周辺では、土器棺には原則的には胎児・乳児を埋葬するが、成人の遺体のケースは、身体的な異常事態が生じた人物の身体の一部を、土器棺へ納めたと考えられるのである。

香川県稲木遺跡では、計10基の土器棺墓が検出されたが、弥生時代終末の第8号壺棺墓の被葬者は、10歳代後半から20歳代とされる（恒川1989）。埋葬状態は口頸部を打ち欠いた壺を棺身とし、別個体の壺の胴部片で棺身を蓋した形で、「合口」ではない。しかし、棺身に用いられた土器の器高は70.4cmであるから、成人の場合は屈葬するか、再葬しない限り埋葬は不可能である。被葬者が1～2歳の幼児と考えられる香川県彼ノ宗遺跡SX-01の棺身の器高は40.6cm、7歳前後の小児とされる同遺跡SX-03の棺身の器高は52.8cm、同じく7歳前後の小児とされる同遺跡SX-09の棺身の器高は81.5cm、乳児とされる香川県九頭神遺跡SX-04の棺身の器高は51.4cmである。つまり棺のサイズと被葬者の年齢はある程度対応するといえよう。そこで、稲木遺跡の他の土器棺墓の棺身の器高を見てみたい。すると最小は第1号壺棺墓の40.2cmで、最大は第59.6cmであり、すべてこの範囲に収まる。第8号壺棺墓の器高の特異さが際立っている。

つまり弥生時代後期～終末の香川県周辺でも、やや土器棺に埋葬する年齢が上がるものの、成人ではなくやはり原則的には乳児・幼児・小児が埋葬されており、土器棺に埋葬する被葬者の年齢の上昇に伴って、大型の土器（主として壺）が棺身に採用される傾向が看取される。これらのことから、土器棺に埋納された若年や成人の場合は身体の一部である可能性が高いと考えられる。

では何故、これらの「大人」に「子供」と同様の埋納法がとられたかを考えてみよう。中世において下人・所従といった身分の低い者は、「童」とも呼ばれており、癩病の者は「童」や「非人」よりも更に身分が低いとされ、最も低く位置付けられていたという（黒田 1986）。身分の低いものや身体的に障害をもつものは、その社会において労働力・成員とは見なされず、聖と俗というベクトルの違いはあれ「子供」に近い扱いを受けていたともされている。また、中国では土器棺へ「子供」を埋葬する際には、

母胎への回帰を意識し遺体を丸くしようとする（何 1991）。ところで、江戸時代の癩病で死亡した成人遺体に鉄鍋を被せる風習がある（桜井 1992, 1996）。この例では、魂を鉄鍋に封じ込め丸くするという意識が働いていたのではあるまいか。これらの諸例を参考とすれば、弥生時代において肉体的・精神的に異常を来たした者は、労働力・成員とは見ず、その復活への恐怖から土器棺へと埋納され、結果として「子供」と同様の葬法がとられたのではなかろうか。

次に遺体は土器棺墓に埋葬するまでにどのようなプロセスを経るのかという問題についてふれたい。

土器棺に埋葬される遺体はどのようにして埋葬地へ運ばれたのだろうか。この問題について六車恵一は、香川県大井遺跡で、口頸部を打ち欠いて棺身とした土器棺と、その棺身の口頸部と一緒に発見されたことから、遺体は最初から棺に収納して埋葬地にまで搬入したのではなく、遺体と完全な土器を別々に持って行き、埋葬地で棺に使用する土器を必要なだけ打ち欠き納めたと考えた（六車 1959）。これと類似する例が、岡山県鹿田遺跡で見られる。土器棺-2は、口頸部を打ち欠いた弥生時代後期前葉の壺を棺身とし、鉢を棺蓋にする。打ち欠かれた壺の口頸部は、土坑内の南東隅の壺底部に立てかけて置かれていた（山本編 1988）。これらの少数の事例を普遍化してしまうのは、危険ではあるが少なくとも、弥生時代後期の讃岐地方や吉備地方では、土器と遺体は別々に埋葬地まで運搬したと考えてよからう。

では遺体は死亡してから、どれぐらい時間が経過して埋葬されたのだろうか。この問題についてヒントになる事例がいくつかある。

大阪府西ノ辻遺跡第27次調査では、甕を棺身に、鉢を棺蓋にした土器棺墓から1歳ぐらいの幼児遺体が検出された。鑑定によれば骨の数が多いため2体を入れた可能性もあるという（曾我ほか 1994）。もし2体が合葬されたとすれば、遺体がある程度の時間を経てから埋葬されたとも理解で

き興味深い。山口県綾羅木郷遺跡では、昭和31（1956）年の本遺跡最初の発掘調査の際、土器棺はA地区第七号堅穴内に弥生時代前期末の壺に甕を被せた状態のもの4組と単独の甕が1点、壁面に沿って一列に並べられていた。これらを土器棺だとする根拠として調査者の小野忠熙は、これらの内の甕の中から1cmの人骨片が出土したことをあげる。この人骨に関しては、年齢・性別等のデータは提示されていない。しかし小野は、棺に使用された土器の大きさから考えて、洗骨葬を予想しない限り嬰兒や胎児の遺骸を納めたものと考えてよいとしている（小野 1958）。土器棺が墓域ではなく、住居跡内に人骨が置かれていたという点で特異であり、遺体である一定期間住居跡内に置いた後に埋葬したことを想起させる事例である（国分 1981）。

次に問題となるのは、では一体何歳までが「子供」で、何歳からが「大人」であるかである。弥生時代の人間の平均寿命は、現在と比べて著しく短いと考えられるから、当然「大人」と「子供」の境界も現在とは異なっていると思われる。そのことを念頭に置きながら、事例を検討してみよう。

近畿地方の場合、土器棺墓が顕著に見られる時期は弥生時代中期中葉から末にかけてである。土器棺に遺体が残存していた事例もこれを反映して、弥生時代中期中葉～末に集中する。これらのうち、大阪府亀井遺跡132-OU例と兵庫県朝谷遺跡例はそれぞれ「小児」、「幼児」とされるが、いずれも医学的な鑑定を行っておらず根拠に乏しい。これらを除外して考えるならば、近畿地方の場合、弥生時代中期の土器棺墓には胎児と乳児が葬られるという原則があったようである（但し、西ノ辻遺跡第27次甕棺墓の被葬者は1歳ぐらいの幼児とされるが、体の大きさからすれば幼児の中でも限りなく乳児に近いといえよう）。土器棺に埋葬することが、「子供」であることの象徴とすれば、弥生時代中期の近畿地方の場合は、土器棺に埋葬された胎児・乳児が「子供」であり、これ以上は「大人」と同様に木棺墓、土坑墓へ埋葬されていたことになる。しかしこの場合は、土器棺墓

に埋葬する別の要因も考えられる。縄文時代後・晩期の東日本では、「甕棺葬」されたのは早期新生児死亡例で、逆に土坑などに埋葬された胎児・新生児は死産児であった可能性が高いという（山田 1994）。つまり早期新生児が死亡した場合には、土器棺に葬ったとも解釈できる。近畿地方弥生時代中期の土器棺は、後の讃岐地方の様な大型の土器を使用する例はほとんど見られない。つまり、近畿地方弥生時代中期社会では、土器棺へ埋葬するのは早期新生児死亡の場合である可能性が高いとしておく。

讃岐地方では、弥生時代後期後半に土器棺墓が波及し盛行するが、前述したように、ここでの被葬者の下限は乳児であるのに対して、上限は7歳前後と少し高い。つまり弥生時代後期の讃岐地方では、少なくとも7歳前後までは「子供」として扱われたと考えたい⁶⁾。

東日本ではどうだろうか。参考までに見ておきたい⁷⁾。群馬県渋川市の有馬遺跡では、弥生時代後期後半の土器棺に葬られるのは4歳以下で、それ以上の年齢の遺体は、未成年者・成人を問わず礫床墓に葬られている（森本・吉田 1990）。このことは、群馬県高崎市の新保遺跡の弥生時代後期後半の土器棺墓に葬られた遺体の年齢が4～5歳であること（森本・吉田 1988）からもある程度裏付けられよう。

群馬県では弥生時代後期では4・5歳以下が「子供」として考えられていたといえる。

V. まとめ

以上のように、弥生時代では土器棺・土器棺墓にはその当時「子供」と見なされたものが葬られたか、もしくは早期新生児が埋葬されたと考えた。また「子供」の概念は時期・地域によって少しずつ異なっていたことも指摘した。更に土器棺に成人が埋葬された場合は、肉体的、もしくは精神的な異常死を遂げた者である可能性が高いと考えた。

残念なことは、土器棺墓内に遺体が遺存していても、医学的鑑定が行わ

れていない資料があることである。今後、土器棺内埋葬遺体が発見された場合には、速やかに鑑定が行われることを望むばかりである。

これからの課題として、土器棺以外に埋葬された遺体の年齢の下限を検討することで、当時の社会における「大人」と「子供」の境界が明瞭になるのではないかと思う。稿を改めて検討したい。

また、今回土器棺に埋葬された成人は、肉体的、もしくは精神的に異常死した者であると考えたが、出土遺体の保存が良好であれば、詳細な検討を行うことにより、精神的異常の根拠は見つけることは難しいであろうが、肉体的異常の場合ならば、骨病理として認めることができるかもしれない。

「子供」と「大人」、何気なく我々が日常様使用するこの概念は曖昧模糊としており、これから考えるべき事は多いのである。(文章中 敬称略)

本稿作成に於いて、水野正好先生、酒井龍一先生の御指導を賜わった。また以下の諸先生・諸氏から御教示・御協力を受けた。記して感謝したい。

大森 円、鐘方正樹、金村浩一、田畑直彦、松田朝由、六車恵一、山口誠治、山田康弘(順不同・敬称略)

(文化財史料学専攻博士後期課程 3年)

【註】

- 1) 本稿では所謂甕棺墓、つまり成人用の大型甕を製作し、遺体を埋葬する地域は含んでいない。甕棺墓の分布については、藤尾慎一郎の定義に従う(藤尾 1989)。
- 2) 例えば、後藤 1923など。
- 3) 遺体の年齢区分については、永井昌文らの、乳児0歳、幼児1～5歳、小児6～11歳、若年12～19歳、成年20～39歳、熟年40～59歳、老年60歳以上という分類に従った(中橋・土肥・永井 1985)。また出産前の遺体は、胎児とする。
- 4) 土器棺・土器棺墓の諸属性については、前稿に基本的に従うが、(角南・山内 1998)、対照地域を拡大するにあたって要所で改訂を行っている。本稿で問題とする、その立地・棺の器種組成・埋葬状態についてあけておく。

《立地》

- A類—方形周溝墓・円形周溝墓と立地上関係するもの
 - A 1—方形周溝墓・円形周溝墓の主体部として埋置されたもの
 - A 2—方形周溝墓・円形周溝墓の溝内・溝底に埋置されたもの
 - A 3—方形周溝墓・円形周溝墓よ隣接して埋置されたもの
- B類—土塚墓と立地上関係するもの
- C類—墳丘墓と立地上関係するもの
 - C 1—墳丘墓の主体部として埋置されたもの
 - C 2—墳丘墓の盛土・墓壇内に埋置されたもの
- D類—古墳と立地上関係するもの
 - D 1—古墳の主体部として埋置されたもの
 - D 2—古墳の盛土・墓壇内に埋置されたもの
- E類—単一墓制（他の墓制と立地上関係しないもの）
 - E 1—単独
 - E 2—複数
- F類—住居跡の覆土中・床下・周辺に埋置されたもの
- G類—支石墓と立地上関係するもの
- H類—箱式石棺墓と立地上関係するもの

《器種組成》

- I類—棺身に壺を使用するもの
 - I 1—棺蓋に壺を使用するもの
 - I 2—棺蓋に甕を使用するもの
 - I 3—棺蓋に高杯を使用するもの
 - I 4—棺蓋に鉢を使用するもの（台付鉢も含む）
 - I 5—棺蓋に石を使用するもの（板石・河原石等）
 - I 6—棺蓋が無いもの（＝単棺）
 - I 7—棺蓋が不明であるもの（削平・攪乱などを受けている）
 - I 8—その他
- II類—棺身に甕を使用するもの
 - II 1—棺蓋に壺を使用するもの
 - II 2—棺蓋に甕を使用するもの
 - II 3—棺蓋に高杯を使用するもの
 - II 4—棺蓋に鉢を使用するもの（台付鉢も含む）
 - II 5—棺蓋に石を使用するもの（板石・河原石等）
 - II 6—棺蓋が無いもの（＝単棺）

Ⅱ 7—棺蓋が不明であるもの（削平・攪乱などを受けている）

Ⅱ 8—その他

Ⅲ類—土器蓋土坑墓

《埋葬状態》

ほぼ直立なものを正位、墓坑に対して横に置かれているものを横位、棺が天地逆に置かれるものを逆位、斜交するものを斜位とする。

- 5) 報告書では、「成人の歯」とされるが、山口誠治氏の御教示によれば、乳歯ではなく永久歯が出土していることから成人とみなしたとのことである。
- 6) 水野正好は平安時代の日記『伸資王記』、『権記』などの記述から、この時代に七歳以下の小児は葬礼なく仏事もとり行なわず、河原へ棄てられたことが一般であったとする（水野 1996）。
- 7) 東海以東の東日本への土器棺墓の波及は、方形周溝墓が東日本へと広がる動きに伴うと考えられる（坂口 1991, 1992）。この時期は東海地方では弥生時代中期後半と考えられ、それ以前は再葬墓として土器に遺体が葬られることはあったが、系譜上異なるものである。このため東日本での土器棺墓という墓制といえるものは弥生時代中期後半以降に限定され、この時期では西日本資料との対比は可能であると考える。

【引用・参考文献】

- 池田次郎 1983「長瀬高浜遺跡出土の人骨について」『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書』
V (助鳥取県教育文化団)
- 石野博信ほか 1982『田能遺跡発掘調査報告書』 尼崎市教育委員会
- 芋本隆裕 1992『西之辻遺跡第23次発掘調査報告』 東大阪市教育委員会・(助東大阪
市文化財協会)
- 芋本隆裕・松田順一郎編 1984『鬼虎川遺跡第7次発掘調査報告3』 (助東大阪
市文化財協会)
- 岩崎卓也 1984「中ノ浜遺跡の調査—東京教育大学一」『史跡 中ノ浜遺跡』 豊浦
町教育委員会
- 小田嶋梧郎 1985「岡山市鹿田地区出土・弥生時代の乳歯」『岡山歯学会雑誌』4—
1 岡山歯学会
- 小田嶋梧郎 1988「SX-04から出土した小児の歯の鑑定結果」『九頭神遺跡発掘調査
報告書』 九頭神遺跡発掘調査団・善通寺市教育委員会
- 小田嶋梧郎 1995「津寺遺跡中屋調査区土器棺墓—1出土の乳歯について」『津寺遺
跡2』 日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員
会

- 小野忠熙 1955「乳臼歯を出土した弥生式甕棺」『私たちの考古学』6 考古学研究会
- 小野忠熙 1957「本州の西端地方における彌生式壺棺墓の性格」『日本考古学協会第20回総会研究発表資料』 日本考古学協会
- 小野忠熙 1958「山口県下関市綾羅木弥生式遺跡」『考古学雑誌』43-4 日本考古学協会
- 片山一道 1990『古人骨は語る』同朋舎
- 金関 恕 1984「史跡 中ノ浜遺跡の意義」『史跡 中ノ浜遺跡』 豊浦町教育委員会
- 鎌谷木三次 1958「播磨山崎出土の壺棺」『兵庫史学』16 兵庫史学会
- 亀山行雄 1995「土器棺墓について」『津寺遺跡2』 日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会
- 九州大学医学部解剖学第二講座編 1988『日本民族・文化の生成2』 六興出版
- 黒田日出男 1986『境界の中世 象徴の中世』 東京大学出版会
- 後藤守一 1923「甕棺・陶棺について(1)」『考古学雑誌』13-9 日本考古学会
- 近藤義郎 1952「備中国都窪郡庄村出土の弥生式壺形甕棺」『古代学』1-2 (助古代学協会)
- 恒成茂行 1989「善通寺市内の稲木遺跡における稲C壺棺墓の歯牙について」『稲木遺跡』 香川県教育委員会・(助)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
- 国分直一 1981「呪術的造形および復葬の形跡」『綾羅木郷遺跡発掘調査報告I』 下関市教育委員会
- (助)鳥取県教育文化財団編 1982『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書IV』 (助)鳥取県教育文化財団
- 坂口滋皓 1991「東日本弥生墓制における土器棺墓(1)」『神奈川考古』27 神奈川考古同人会
- 坂口滋皓 1992「東日本弥生墓制における土器棺墓(2)」『神奈川考古』28 神奈川考古同人会
- 桜井準也 1992「近世の鍋破り人骨の出土例とその民俗学的意義」『民俗考古』1 慶応義塾大学文学民族学考古学研究室
- 桜井準也 1996「近世の鍋破り人骨について」『江戸遺跡研究会第9回大会 江戸時代の墓と墓制』 江戸遺跡研究会
- 笹川龍一 1985『彼ノ宗遺跡』 善通寺市教育委員会
- 笹川龍一 1988「壺棺出土の小児の歯についての一考察」『九頭神遺跡発掘調査報告書』 九頭神遺跡発掘調査団・善通寺市教育委員会
- 潮見 浩 1959「山陽地方における彌生時代の墓制」『古代学』8-2 (助)古代学協会

- 末永雅雄 1944「合蓋土器の埋置状態」『宮瀧遺跡』奈良県
- 角南聡一郎・山内基樹 1998「兵庫県下の土器棺・土器棺墓」『播磨大中遺跡発掘調査報告書』播磨町教育委員会・奈良大学文学部考古研究室
- 善通寺市編 1977『善通寺市史』1 善通寺市
- 曾我恭子ほか 1994『西之辻遺跡第27次・鬼虎川遺跡第32次発掘調査報告書』(助)大阪文化財協会
- 高島 徹ほか 1980『亀井・城山』(助)大阪文化財センター
- 多賀谷 昭 1992「西之辻遺跡から出土した弥生中期の胎児または新生児骨について」『西之辻遺跡第23次発掘調査報告』東大阪教育委員会・(助)大阪文化財協会
- 多度津町編 1963『多度津町史』多度津町
- 何 篤 1991「関軒瓮棺葬俗的原邏輯思維特徴」『史前研究 1990-1991』陝西省考古研究所・西安半坡博物館
- 辻村純代 1993「古代日本における子供の帰属」『考古論集』潮見 浩先生退官記念事業会
- 松下孝幸 1994『日本人と弥生人』祥伝社
- 松下 勝 1976「神崎郡福崎町朝谷遺跡出土の土器棺」『兵庫考古』4 兵庫県考古研究会
- 馬目順一 1987「幼児用壺・甕棺墓」『弥生文化の研究』8 雄山閣
- 三好孝一ほか編 1995『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告—第4次—』(助)大阪文化財センター
- 森井貞雄 1989『亀井遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会
- 中橋孝博・土肥直美・永井昌文 1985「金隈遺跡出土の弥生人骨」『史跡金隈遺跡』福岡市教育委員会
- 中山平次郎 1920「大甕を發見せる古代の遺蹟(三)」『考古学雑誌』11-4 日本考古学会
- 西岡達哉ほか 1989『四国横断自動車建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告6』香川県教育委員会・(助)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
- 平本嘉助 1981「骨からみた日本人身長の変り変わり」『考古学ジャーナル』197 ニューサイエンス社
- 藤尾慎一郎 1989「九州の甕棺」『国立歴史民俗博物館研究報告』21 国立歴史民俗博物館
- 藤田 等 1988「北部九州における弥生時代未成人埋葬について」『日本民族・文化の生成1』六興出版

- 間壁葎子 1958「岡山県都窪郡庄村上東遺跡出土の壺棺」『瀬戸内考古学』2 瀬戸内考古学会
- 水野正好 1996「産育呪儀三題(二)」『文化財学報』14 奈良大学文学部文化財学
科
- 六車恵一 1959「讃岐における合口土器」『香川県文化財教育会報』特別5号 香川
県文化財協会
- 森本岩太郎 1986「竹田峯遺跡出土の壺棺内人骨所見」『西裏・竹田峯』佐久市教
育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター
- 森本岩太郎・吉田俊爾 1988「新保遺跡出土の人骨について」『新保遺跡Ⅱ』群馬
県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財事業団
- 森本岩太郎・吉田俊爾 1990「有馬遺跡出土の弥生時代後期の人骨について」『有馬
遺跡Ⅱ』群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財事業
団
- 山田康弘 1994「甕棺葬の条件」『史境』28 歴史人類学会
- 山田康弘 1997「縄文時代の子供の埋葬」『日本考古学』4 日本考古学協会
- 山本悦代編 1988『鹿田遺跡Ⅰ』岡山大学埋蔵文化財センター
- 吉野益見 1926「広島付近の貝塚 其三」『考古学雑誌』16-12 日本考古学会

追記 校正中に二つの事実の漏れに気付いたが、本稿では充分にいかせなかった。今
後の課題としたい。

1. 大阪府八尾市竹洲遺跡で、方形周溝墓に伴う可能性のある弥生時代中期頃の土器
棺墓内から、臼歯1点が出土している。医学的鑑定によれば、この歯は上部の臼歯
で、5～6歳までの幼児の乳歯とされる(坪田 1992)。
2. 本間元樹は、弥生時代の遺跡から出土した人骨を全国的に集成している。この中
で、土器棺内から出土した事例もいくつか集成しており、最初に西日本の土器棺内
の遺体に留意した労作と評価できよう(本間 1993)。

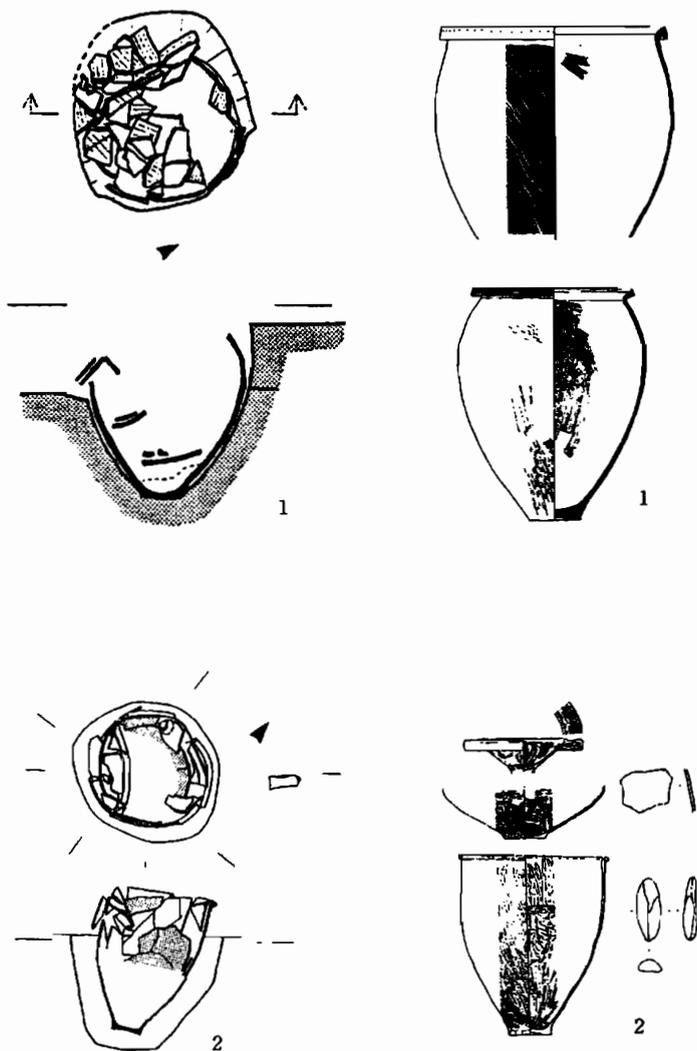
【追記・文献】

- 坪田真一 1992「Ⅲ 竹洲遺跡(第2次調査)」『八尾市文化財調査研究会報告』35
(財)八尾市文化財調査研究会
- 本間元樹 1993「弥生人骨地名表(第1版)」『弥生文化博物館研究報告』2 弥生
文化博物館

表1 西日本の埋葬遺体遺存土器棺一覧

No.	遺跡名	遺構名	所在地	時期	遺体の年齢	立地	器種組成	埋葬状態	文献
1	亀井	SX3002	大阪府八尾市	中期後	乳児	E 1	II 2	直位	高島ほか 1980
2	亀井	132-OU	大阪府八尾市	中期後	小児	E 1	II 8	斜位	森井 1989
3	巨摩	11号方形周溝墓第9号主体部	大阪府東大阪市	中期末 ～後期初	永久歯	C 1	II 4	斜位	三好ほか編 1995
4	西ノ辻	第17次甕棺墓1	大阪府東大阪市	中期後	乳児	E 1	II		芋本 1992
5	西ノ辻	第17次甕棺墓2	大阪府東大阪市	中期後	乳児	E 1	II		芋本 1992
6	西ノ辻	第23次B地区甕棺墓	大阪府東大阪市	中期後	10ヶ月前後の胎児か乳児	E 1	II 8	横位	芋本 1992
7	西ノ辻	第23次C地区壺棺墓	大阪府東大阪市	中期後	7ヶ月前後の胎児	E 1	I 1	直位	芋本 1992
8	西ノ辻	第27次甕棺墓	大阪府東大阪市	中期後	幼児	E 1	II	横位	曾我ほか 1994
9	鬼虎川	5 q 地区壺棺墓	大阪府東大阪市	中期後	1歳ぐらいの乳児	E 1	I 1	直位	芋本・松田編 1984
10	田能	第10号墓	兵庫県尼崎市	中期後	生後6ヶ月乳児	E 1	I 6	斜位	石野ほか 1982
11	田能	第12号墓	兵庫県尼崎市	古墳前	2・3歳の幼児	E 1	I 1	斜位	石野ほか 1982
12	田能	第20号墓	兵庫県尼崎市	中期中	6ヶ月胎児か生後4ヶ月乳児	E 1	I 1	直位	石野ほか 1982
13	朝谷		兵庫県神崎郡福崎町	中期末 ～後期初	幼児	E 1	I 4		鎌谷 1958, 松下 1976
14	長瀬高浜	SXY01	鳥取県東伯郡羽合町	前期末 ～中期初頭	4～5歳の幼児	B	I 2	横位	鳥取県教育文化財団編 1982, 池田 1983
15	上東		岡山県倉敷市	後期前葉	7ヶ月胎児		I 4		間壁 1958
16	津寺	中屋調査区土器棺墓-1	岡山市	後期前葉	乳白歯	E 2	I 4	斜位	亀山 1995, 小田嶋 1995

No.	遺跡名	遺構名	所在地	時期	遺体の年齢	立地	器種組成	埋葬状態	文献
17	鹿田	第1次土器棺-2	岡山市	後期前葉	生後間もない乳児	E 1	I 4	斜位	山本編 1988, 小田嶋 1985
18	用田		山口県那珂郡周東町	終末前後	9~13歳	E 1	II 2	横位	小野 1955
19	中ノ浜	1960年度1号甕棺	山口県豊浦郡豊浦町	前期末	成人	H	II		金関 1984, 九大医学部編 1988
20	中ノ浜	1960年度2号甕棺	山口県豊浦郡豊浦町	前期末	乳児	H	II		金関 1984, 九大医学部編 1988
21	中ノ浜	1960年度3号甕棺	山口県豊浦郡豊浦町	前期末	乳児	H	II		金関 1984, 九大医学部編 1988
22	中ノ浜	1970年度H-2壺棺	山口県豊浦郡豊浦町	前期末 ~中期中	成人	H	I 5		岩崎 1984
23	中ノ浜	1971年度J-3区壺棺	山口県豊浦郡豊浦町	前期末 ~中期中	乳児	H	I 5	斜位	岩崎 1984
24	綾羅木郷		山口県下関市	前期末		F	I 2	直位	小野 1958
25	彼ノ宗	SX-01	香川県善通寺市	後期後半	生後1~2年の幼児	F	I 7	斜位	笹川 1985, 1988
26	彼ノ宗	SX-03	香川県善通寺市	後期後半	7歳前後の小児	F	I 4	斜位	笹川 1985, 1988
27	彼ノ宗	SX-05	香川県善通寺市	終末		F	I 4	斜位	笹川 1985, 1988
28	彼ノ宗	SX-09	香川県善通寺市	終末	7歳前後の小児	F	I 4	斜位	笹川 1985, 1988
29	九頭神	SX-04	香川県善通寺市	終末	生後間もない乳児	F	I 1	斜位	笹川 1988, 小田嶋 1988
30	稲木	第8号壺棺墓	香川県善通寺市	終末	10歳後半~20歳代	B	I 1	斜位	西岡ほか 1989, 恒成 1989
31	旧練兵場		香川県善通寺市	後期?	小児の歯				善通寺市 1977
32	本町 1丁目		仲多度郡多度津町	後期?	幼児のものらしい骨片				多度津町 1963



[各文献より、番号は表1に対応]
 遺構:S=1/20, 遺物:S=1/16

図1 西日本の埋葬遺体遺存土器棺(1)

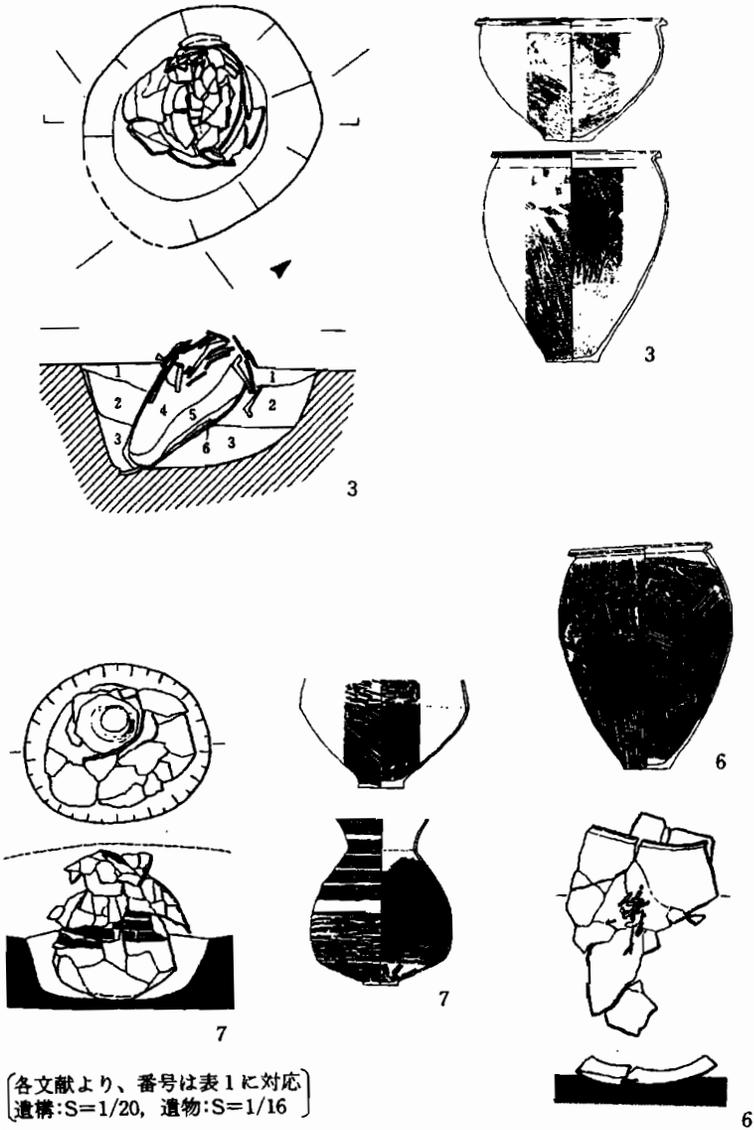


図2 西日本の埋葬遺体遺存土器棺(2)

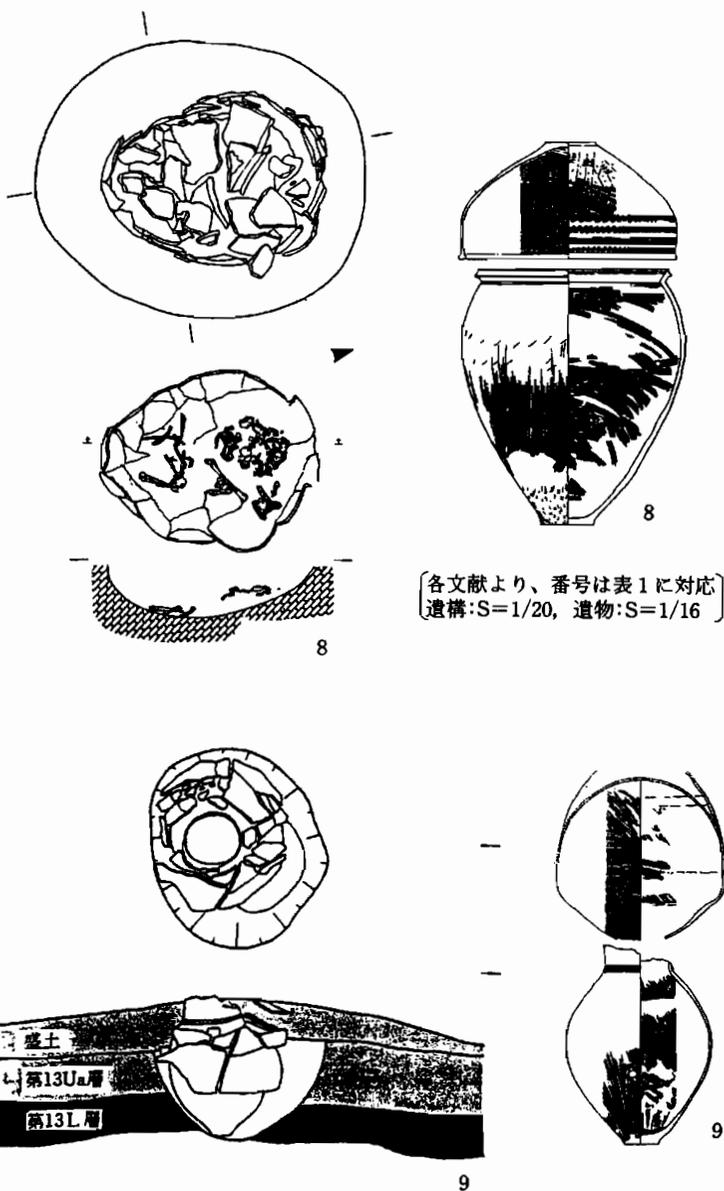


図3 西日本の埋葬遺体遺存土器棺(3)

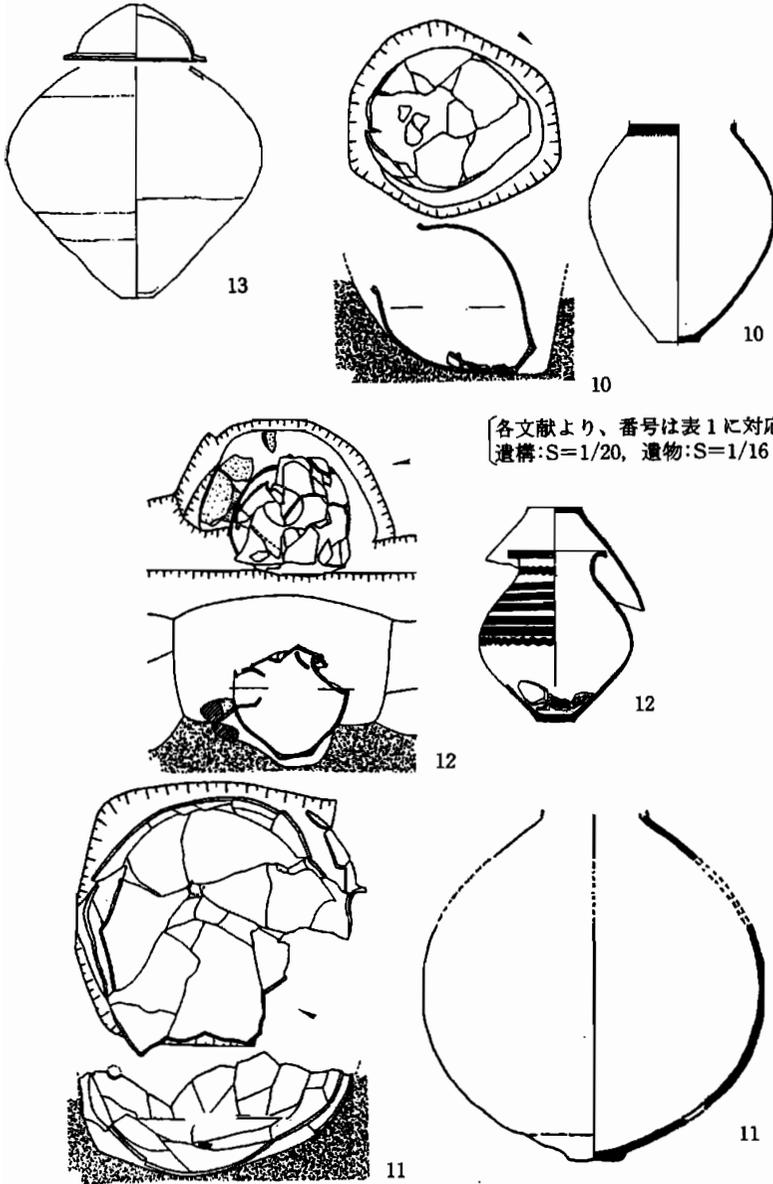


図3 西日本の埋葬遺体遺存土器棺(4)

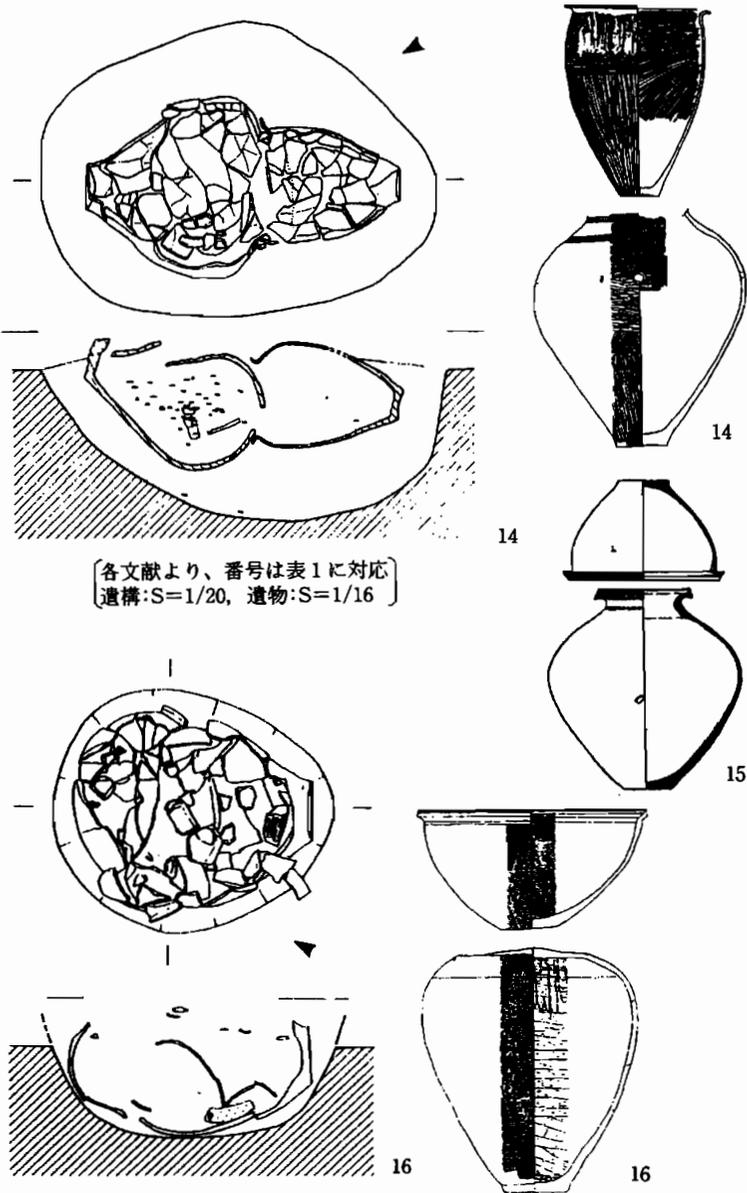
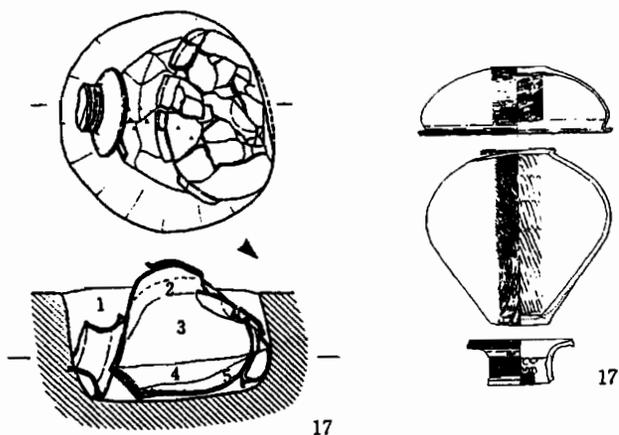
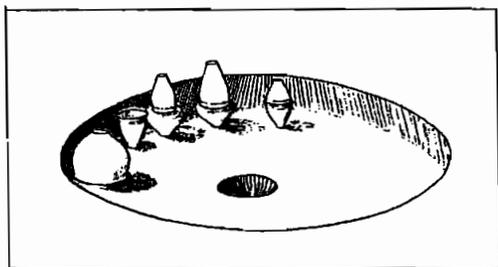


図3 西日本の埋葬遺体遺存土器棺(5)



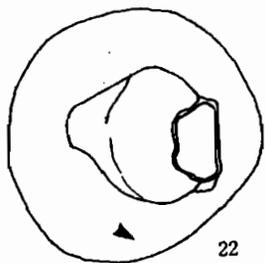
各文献より、番号は
表1に対応。24を除き
遺構:S=1/20,
遺物:S=1/16



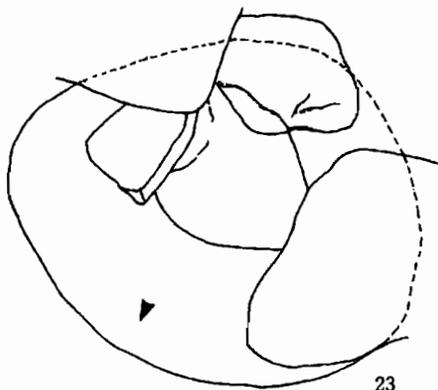
24



22



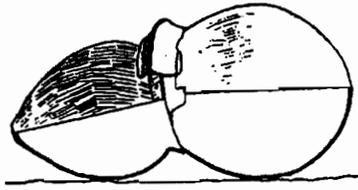
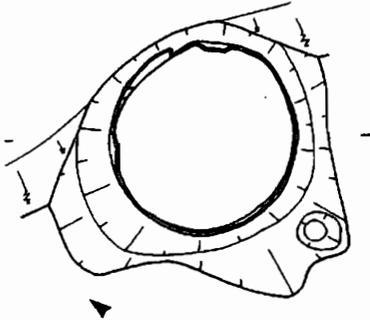
22



23

図3 西日本の埋葬遺体遺存土器棺(6)

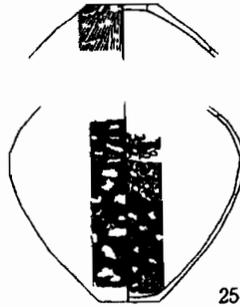
28



18

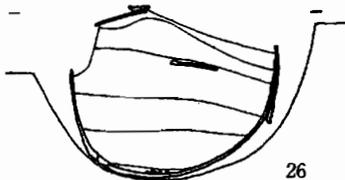
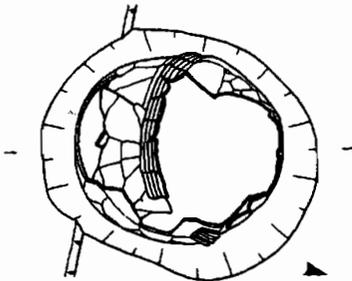


25

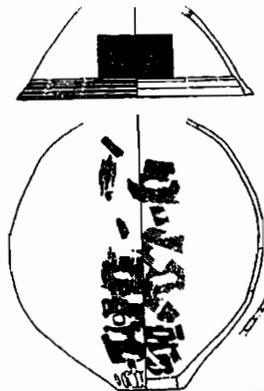


25

[各文献より、番号は表1に対応
18を除き、遺構:S=1/20, 遺物:S=1/16]



26



26

図3 西日本の埋葬遺体遺存土器棺(7)

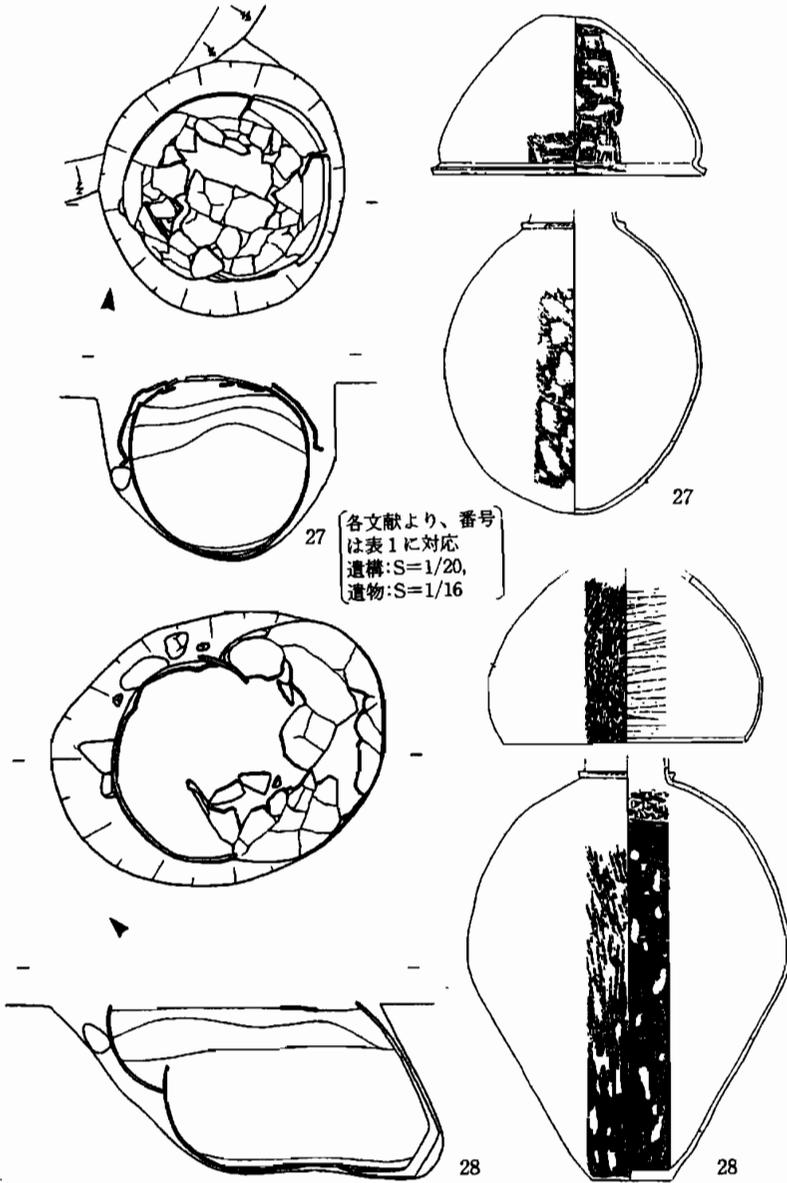


図3 西日本の埋葬遺体遺存土器棺(8)

